

名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2023年 09月 27日

学部・学科名 世界教養学部国際日本学科

担当教員氏名 宮本真有

1. 区分	中期留学 ・ 語学研修 ・ 海外実習
2. プログラム名称	銘傳大学日本語教育実習
3. 渡航先国名	台湾
4. 派遣期間	2023年 3月 6日 (月) ~ 2023年 3月 17日 (金) 12日間
5. 派遣先教育機関名	銘傳大学
6. 参加学生数	2名
7. 派遣目的	銘傳大学(台湾桃園)応用日本語学科学生を対象として、日本語授業の見学や教壇実習を行い、あわせて異文化体験や、銘傳大学の学生との交流の機会をもつこと。
8. 派遣内容	①事前指導：教壇実習で担当する予定の教授内容につき、授業計画立案、教案作成などを行い、指導を受ける。 ②教壇実習：銘傳大学応用日本語学科の初級と中級授業において、実習生は各自2回の教壇実習を行う。実習に先立って銘傳大学教員による教案指導を受け、実習後に批評・助言を受ける。 ③異文化体験：銘傳大学の学生や教員との交流を通して台湾の人と文化に触れる。 ④実習報告書を作成する。

9. 成果	<p>教壇実習に至るまでの過程で、担当課への理解の深め方、教案作成、学生たちとの関係づくり、現地校の背景情報収集など、日本語教育に携わる者として必要なスキルを身につけた。二度行った教壇実習では、その都度振り返りを行うことで、自らの教師としての強みや弱みなどを把握し、今後の改善点を模索しながら、常に学び続ける姿勢を培った。また、また、現地での生活や相手校の学生との交流を通して、台湾の文化や歴史、日本との繋がりなどを学び、異文化理解も深めることができた。</p>
10. 備考	<p>コロナの影響により、台湾入国時に7日間の自主防疫期間が求められた。そのため、台湾での滞在期間は2023年2月26日～3月18日の21日間であった。</p>

以上

台湾で行った日本語教育実習についての報告書

2月26日から3月18日までの3週間、台湾の銘傳大学で日本語教育実習を行った。台湾での異文化交流や実習を通して多くの学びや経験を得ることができた。本報告書では、台湾実習の目的とその達成度、実習を通して学んだこと、台湾で感じたことの3点から、自身の台湾実習について記述していく。

実習の目的は大きく分けて2つあった。日本語教育に必要な知識や経験を得ることと異文化交流や海外での生活を通して精神的に成長することだ。これらには、卒業後、日本語教育の場で働きたいと考えていること、同世代の人に比べ、自身の精神的に幼い部分が目立つという背景があった。そして、これらの目的は、前者は達成でき、後者は未だ至らないところもあるといった結果になった。まず、日本語教育について必要な経験や知識を得ることだが、座学だけでは学ぶことができないような、貴重なものを得ることができた。詳しくは後述する。精神的な成長においては、自身の至らなさで迷惑をかけることも多く、達成できたとは言い難い結果になってしまった。しかしながら、成長できた部分もある。学生という身分が適応されない台湾での生活は、普段自身が如何に学生という身分に守られてきたかを痛感させられた。自分の行動に重い責任が伴うこと、日本での生活は多くの人に助けられていることなど、多くのことを実感できた。これらを社会に出る前に知ることができたのは、本当に良い機会であったと考えている。

台湾では、現地の学生や先生、人々との交流や実習や見学から様々なことを学ぶことができた。実習や見学では、前述した通り、実際に教壇に立たないとわからないような知識を得ることができた。例えば、授業を行うときの教師の動きが、教室にいい意味での緊張感を生むことにつながることだ。アクティビティ中に教室内を歩き回った時にこれが実感でき、先生が時々教室を歩き回るのには理由があったことを理解でき、先生が教室内で行う行動のほとんどには意味があることを学べた。他にも教師の心構えや授業を組み立てる際に、学習者に興味を持ってもらえるような練習法やアクティビティなどを現地の教員の指導や授業の見学を通して学ぶことができた。特に現地でお話しした徐先生から聞いた「教師としての心構え」は強く印象に残っている。また、実習に関すること以外にも、台湾の文化や歴史についても多くのことを知った。占領時代に日本人が残した文化が台湾に残っており、滞在した桃園には天照を祀った神社があることや、占領時代を生きた祖母や祖父を持つ学生が日本に興味を持ってくれていること、台湾におけるNGな言い回しなど、交流を通して本当に多くのことを学ぶことができた。

最後に、台湾で感じたことについて書いていく。台湾で一番強く感じたのは、親切な人が多いということだ。現地でボランティアをしてくださった生徒の方々は、私たちのために貴重な休日や授業の時間を使ってまで、様々な場所や美味しい店に

案内してくれた。現地の先生には常に気をかけて頂いたり、本当によくしてくださった。また、先生や生徒の方々に限らず、他の人々も親切で、本当に驚いた。

「こちらの方がお得ですよ」と中国語で教えてくれるコンビニの店員や日本とは注文の仕方が違い、困惑して立ち尽くす私に、それを察して注文の仕方を教えに来てくれるマクドナルドの店員や優しいタクシーの運転手など、親切な人が本当に多いように感じた。親切を受けるだけでなく、今後彼らに限らず、様々な人にその親切を返していかなければ、と思わされた。

以上が今回の実習についての報告書だ。この実習では多くの学びや失敗も含む経験を得ることができた。ここで学んだものをそのままにしておくのではなく、しっかりと実践やこれからの生活に活かしていく必要があるだろう。

3週間の台湾実習

就職活動が本格的に始まった3年生の春休み。私は、将来の職業を決めるために実習に参加しました。例年と違い3週間と少し長い実習は、私にとってとても考え深い期間になりました。

まず、私は日本語教育主専攻を受ける身でありながら将来の夢が定まっていません。日本人からみた日本語の面白さというものを感じつつも、日本語教師になろうという意思は強くありませんでした。他の職業にも関心が湧いていません。そう悩んでいる中、とりあえず教壇実習とはどんなものかを知るために台湾実習に参加しました。

実習が始まって強く感じたことは、台湾の方々がとても優しいことです。台湾の先生方は、初対面の私に安心安全に楽しく過ごせることを常に考えていてくださいました。生活面では、台湾の面白い文化や楽しい場所を紹介してくださり、学生とのコミュニケーションを取れる機会を作ってくださいました。また、私が体調を崩した時は、本気で心配して、大事に思ってくださいていることを実感しました。台湾のおすすめのお菓子を持ってきてくださったり、時には、一緒にお弁当を食べて楽しく会話をしたりと、非常に温かく接してくださいました。私は、先生は実習の勉強面を常に考えているというイメージがあったため、生活面や心の面をも気遣う姿にとっても驚きました。最後まで親身になってくださったので、先生方のおかげでリラックスして実習を取り組めました。ここには書ききれないほどとても感謝しています。

そして、台湾の学生たちは、近い年齢ということもあり友達になるのに時間はかかりませんでした。初めて会ったときは、「ずっと楽しみにしてたよ」や「この日を待ってたよ」と明るく出迎えてくれました。私は初めての海外ということもあり、緊張していたのですが、自己紹介をして趣味の話や台湾の話を知ると、一瞬で仲良くなり、楽しく2時間も話していました。その後も、皆で九份や淡水を観光したり、ご飯を食べに行ったりなど、気づけば思い出でいっぱいになりました。日本に帰ってきた今でも、メッセージや写真を送って話をしています。

さらに、台湾では先生や学生だけでなく、現地の方々も優しくかったです。私が大学からホテルに帰る際、バスの降り方が分からずホテルから離れた場所に着いてしまった事がありました。1人で知らない場所に降りたときはとても不安でした。そこでタクシーを拾ってホテルまで戻ることにしたのですが、私の携帯はWi-Fiが繋がっていないと使用することはできません。そこで、分かる中国語や英語を話して、なんとか運転手にWi-Fiを共有してもらいました。すると、運転手は私が不安がっているのを察してくれたのか、「大丈夫だよ、落ち着いてね。知り合いに日本人がいるから電話して翻訳

してもらおうね」と英語で言って、実際に電話してくれました。ホテルに着くまでの間は、台湾の観光地や美味しい食べ物などを教えてもらい、「これは知ってる？」や「これはもう食べた？」などたくさん会話をしてくれました。ホテルに着いた時は、「台湾をもっと楽しんでね」と、最後まで親切に接してくださりました。台湾は、先生や学生だけでなく誰もが優しい人がいる国だと実感しました。また、観光として台湾に遊びに行きたいと思っています。

そんな台湾実習では楽しかったことだけでなく、苦労したことがたくさんあります。

まず、“日本語の授業をする”ときくと、日本でいう小学生レベルの英語を教えるというイメージがありました。そのため、スライドの写真は1枚と大きくカラフルに、文字もポップな感じで作成していました。しかし、実際に台湾の学生は簡単な日本語は通じて、コミュニケーションが難しいということはありません。そのことに驚きを隠せなかったです。指導してくださる先生に「相手は小学生じゃなくて岡さんと同じ大学生だよ」と言われた時、作った教案のまま授業をすると失礼になってしまうと考え直しました。分かるように説明しなくてはと考えていた教師側の簡略なセリフに自由度を増して、より自然な日本語に変えたり、説明量自体も減らしたり、スライドも変えたりなど、教案を1から作り直しました。

そして迎えた実習で楽しかったことは、2つあります。1つ目は、教案通りに授業が進むことです。あらかじめ予想していることが当たった時は、心の中で何回もガッツポーズをしていました。もしかすると顔に出ていたかもしれません。それほど嬉しく、躓くことがないリズムの良い授業ができて楽しかったです。2つ目は、アクティビティによる学生の発言が面白いことです。学生の発言に自由度が増すと、学生の答えや質問、コミュニケーションの量とバラエティーが増え、より豊かな授業になります。中級クラスでは、「もし〇〇なら誰に何をさせるか」という話題を投げると、「もし私がアイドルならファンに貢がせます」という面白い答えや、「もし私がお金持ちなら私のお金で両親を旅行へ行かせます」という素敵な答えが出てきました。それらの答えに対して、「アイドルが好きですか？」や「どこへ行かせますか？」など会話を継続することができ、クラスに一体感が出て楽しい授業だったと実感しています。

しかし、実習で苦労したことも2つあります。1つ目は、指示やコンテキストが明確でなく学生に伝わらなかったことです。指示が伝わらないと、学生が何をしたらいいか分からず良い流れが途切れてしまい、答え合わせの際に訂正ばかりになるという非常に勿体ないことが起きます。ただ写真や文字で伝えても、大事で必要な情報までもが伝わらないということを実感しました。2つ目は、学生の発言に会話を広げることができなかったことです。学生の発言に対して突っ込みを入れると、よりリアルな会話に近づき応用が効きます。また、学生との距離を近づけることもできます。しかし、緊張しているせいで、なかなか踏み込むことが出来ず、会話の機会を流すことが多々ありました。2回目のクラスでは、少し慣れてきたのか、会話を広げる回数が増えましたが、その日の文型を使わせるところまではいきません

でした。私は、長年教師をしているという実力があるからこそ、さらっとできる技だと思い、とても感心しました。

今回の実習を通して、学生ではなく教師の立場になることを体験しました。教案作成は本当に大変で、この実習に参加していなかったら、普段受けている授業での教師側の大変さを知ることはできなかったと思います。それだけでなく、大変さ以上の楽しさや嬉しさなどのやりがいを感じられる職業だと思いました。それは、自分が頑張っているからだけではなく、授業に取り組んでくれる学生がいて、指導してくださる先生方の支えがあるからです。実習の中で学べるものは勉強面だけでなく人間面もあることに気付きました。

最後に、私は日本に帰ってきてから、本格的に就職活動を始めました。日本語教師という職業は、私の将来の夢となり今はひたむきに頑張っています。